加世田市「六堂会」古墳の調査

橋本　達也

はじめに

鹿児島大学総合研究博物館は、2005 年３月１日～ 17 日の間、加世田市小湊に所在する「六堂会」古墳の墳丘確認調査と石棺再精査を目的として、発掘調査を実施した。

１.「六堂会」古墳について

「六堂会」古墳は、1931(昭和６)年に地主が発見し、1941(昭和 16)年には藤森栄一氏の来訪時に氏の指揮によって発掘調査が行われた。この時点で、蓋石上を角礫が覆い、石棺内が赤色に塗られ、床面に底石はなく、粘土上に赤い土を敷いていること、鉄剣・刀子・ガラス玉などの出土したことが報告された。しかし、昭和 16 年以降は基礎的な調査が行われておらず、その位置づけはいまだ不明確である。

２. 名称について

「六堂会」の名称は、古墳の所在地名としては誤ったものであり、問題があることを地主、加世田市文化財審議員を含む多数の方から指摘を受けた。今後、名称に関して再検討が必要である。

３. 今回の調査成果

(1)　石棺は、長辺２枚、短辺１～２枚の板石を組み合わせる。石棺の規模は全長 259cm、最大幅 72.5cm で、内法長 200cm、西小口内法幅 61cm を測る。石材の高さは 50cm 以上あり、そのうち 30cm 程度を埋めている。石棺内には底石がなく、棺床には厚さ 10 ～ 15cm の赤色土を置き、それより下方は石材下端まで粘土で埋めている。

長側石には小口石を嵌め込むための段をつくり出してそれを挟み込んでいる。そのため、長側石と小口石は密着した状態を保っていた。長側石の継ぎ手には、刳り込み段を両側の石につくり、嵌め込んで重ね合わせる。また、一部にはチョウナタタキ技法とみられる痕跡がある。小口石は２石を内外に重ねて立てており、外側石は凝灰岩、内側石は側石などと同様に安山岩を用いた特徴的な構造であった。

(2)　石棺は発見後、一時移され、その後に再び現位置に復したとの謂われがあった。しかし、調査の結果、石棺掘形を再掘削した形跡がなく、それは事実ではないと判断する。

(3)　石棺南側のトレンチでは古墳墳丘を区画する溝、祭祀に伴うとみられる土器、鉄滓・鉄片を確認した。土器は高杯４個体以上、小型鉢、甕、壺などで、古墳時代前期後半の土師器と考えている。この墳丘区画溝は東南部で弧を描く可能性の考えられる場所があり、円墳だと想定できる。

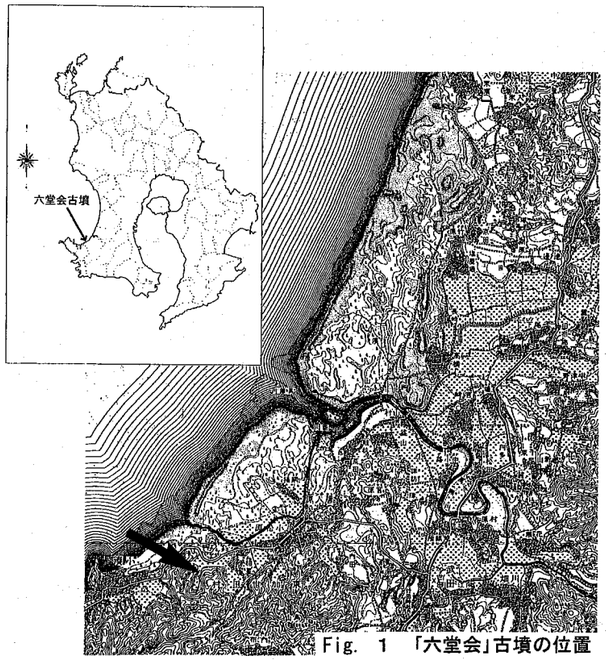

Fig.　1　「六堂会」古墳の位置

おわりに

今回の調査では、石棺の調査と墳丘区画溝の確認、遺物の出土などの成果を得た。また、箱式石棺に見られる精巧な作りは天草地方で知られており、この石棺も天草地域の石棺製作技術によっていると推定する。南薩地域では古墳時代に前方後円墳を中心とする墓制は導入しておらず、基本的には非古墳築造地域である。その中にあって、「六堂会」古墳が単なる石棺墓ではなく、墳丘をもち、墳丘での古墳祭祀まで執り行っていたことが判明したことは、古墳築造にかかわる複合的な葬送観念、技術、古墳を必要とする当地域の社会的背景が存在したことを指摘できる。そこには、南北を結ぶ海上交易拠点として古墳時代社会に連なった南薩の位置づけが大きな役割を果たしていると考えられよう。

墳丘の調査は今回の調査では不十分であったので、2005 年８月下旬を中心に第２次調査を実施する予定である。

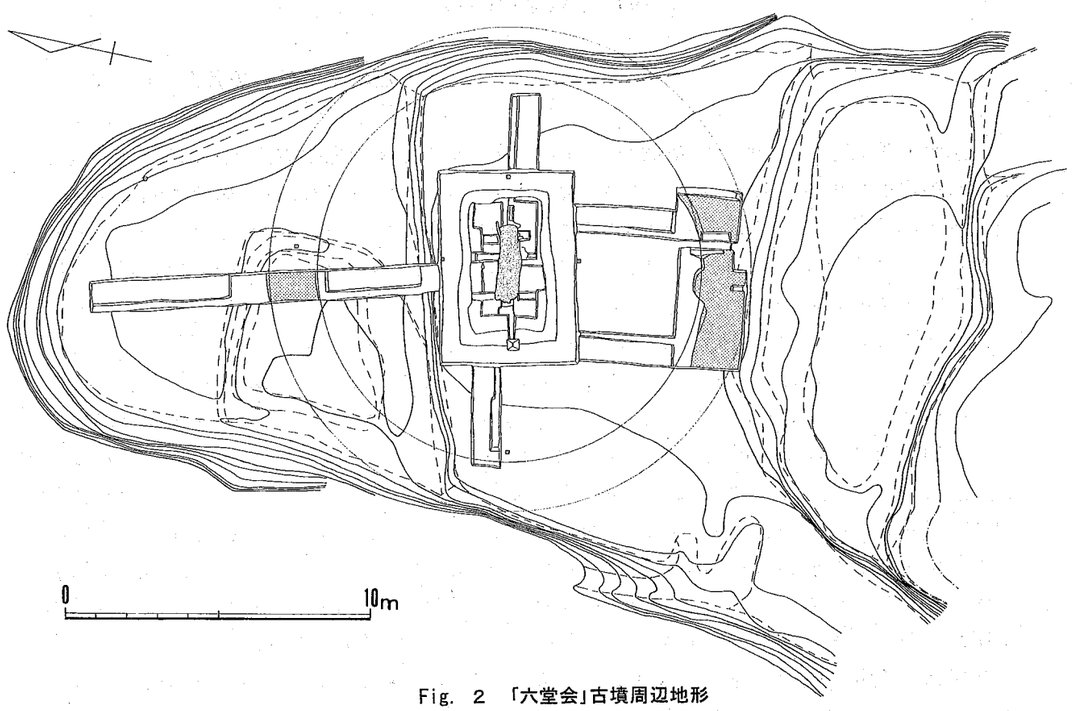

Fig.　2　「六堂会」古墳周辺地形

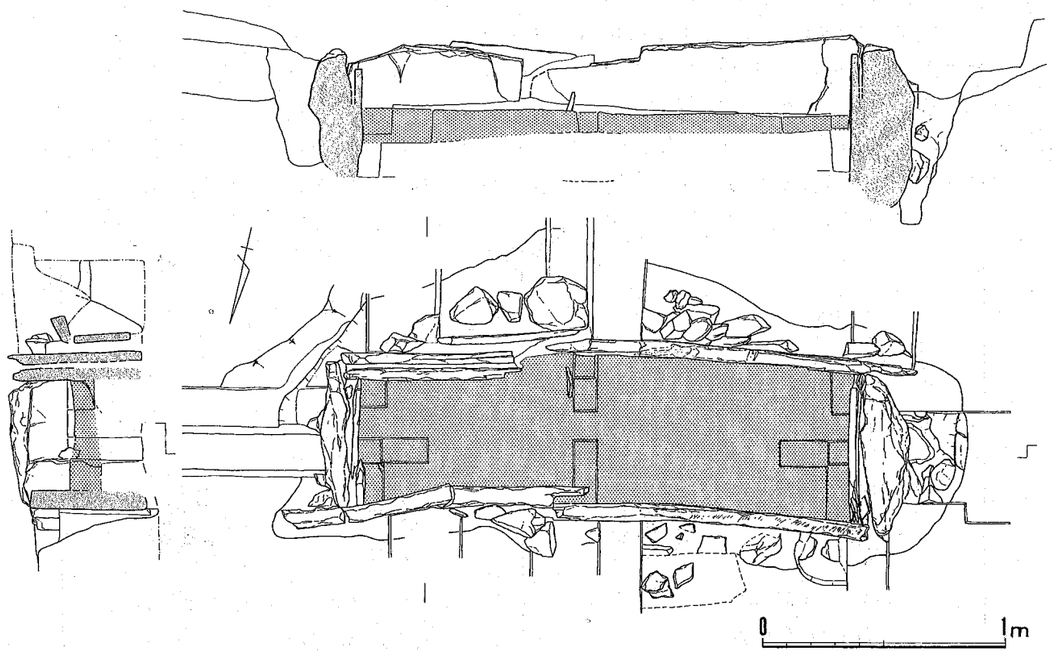

Fig.　3　「六堂会」古墳石棺図（一部）